随筆再掲載

顔

遠藤周作

私は男であるから朝の洗面と散髪屋以外にはあまり鏡というものを見ない。洗面所ではソソクサと顔をあらってしまうから、比較的ゆっくりと自分の顔を見るのは散髪屋で髪をかってもらっている時だ。

ところで鏡で自分の顔をみると、これが美男じゃない。ある女子学生がいつか私に手紙を送ってきて

「あなたは微男子です」

と書いてきたので流石温和しい私も激怒したが、近頃の女子学生は誤字、脱字、を平気で書くから当人まちがったのかもしれぬ。

しかし、あの鏡のなかの顔は、本当の自分の顔じゃない。左右アベコベだからな。つまり人間は一生、自分の本当の顔を自分の眼でみることができぬというわけだな。

ところで、この鏡というのは色々、考えさせる品物だな。私の顔がそこにうつる鏡はいわば虚像であって実像でないわけだが、しかし、これと同じことは我々の人間関係にもいえるな。

他人というものはそこに自分の虚像がうつる鏡だと考えるのは間違いかな。A君には私は親切でやさしい男にみえる。B氏には私はふざけ者で箸にも棒にもかからん人間に見える。C夫人には私はケチで意地悪な奴にうつる。

というふうに他人は私について、それぞれのイメージをもっているからな。そしてそれぞれのこれらイメージはいわば虚像であって、本当の私はひょっとすると彼等のイメージとはちがう人間かもしれないからな。

しかし、我々が自分の存在をうつしだすのはこのように沢山の他人の眼という鏡だからな。沢山の他人が、あなたなら、あなたについて勝手にもつイメージが、結局、あなたの全存在かもしれんからな。というのは例えば伝記なんか読むといい。これは結局、他人がその対象の人間についてもったイメージの総体にすぎなくて、ひょっとすると、本人は伝記に書かれていたのとは別の人間だったかもしれぬ。しかしそのことは本人が死んだり、口をとざしている以上、永久にわからない。

こう考えてみると、結局、我々は虚像というものしか残さずに毎日毎日生きているということになるな。「あれはちがう。本当の俺はこうだ」とは普通だれも言わない。

しかしもし自分の眼が手の上にあって毎日自分の顔をみられたら、こりゃア人間、生きていけないと思うな。アイ、ラブ、ユーなどとシンコクな表情で女に言っている自分の顔をみたいと思う男がこの世にいるだろうか。もしそんな時の顔をみたら、少しでも自意識のある男はキヤッと思って、とてもアイ、ラブ、ユーなどと、平気で言えなくなるだろうからな。

御正 伸・画

旅行と移動

團　伊玖磨

駅や街などで、旅行社や国鉄のポスターがよく目に入る。いずれも旅行への誘いのポスターが多く、夏ならば、海水浴へ、登山へ、秋ならば、何んとか高原へのハイキング、紅葉狩、松茸狩りに、といった工合にしきりに旅心を誘い、人を電車に乗せ、汽車に乗せ、バスに乗せ、飛行機に乗せようという勧誘である。

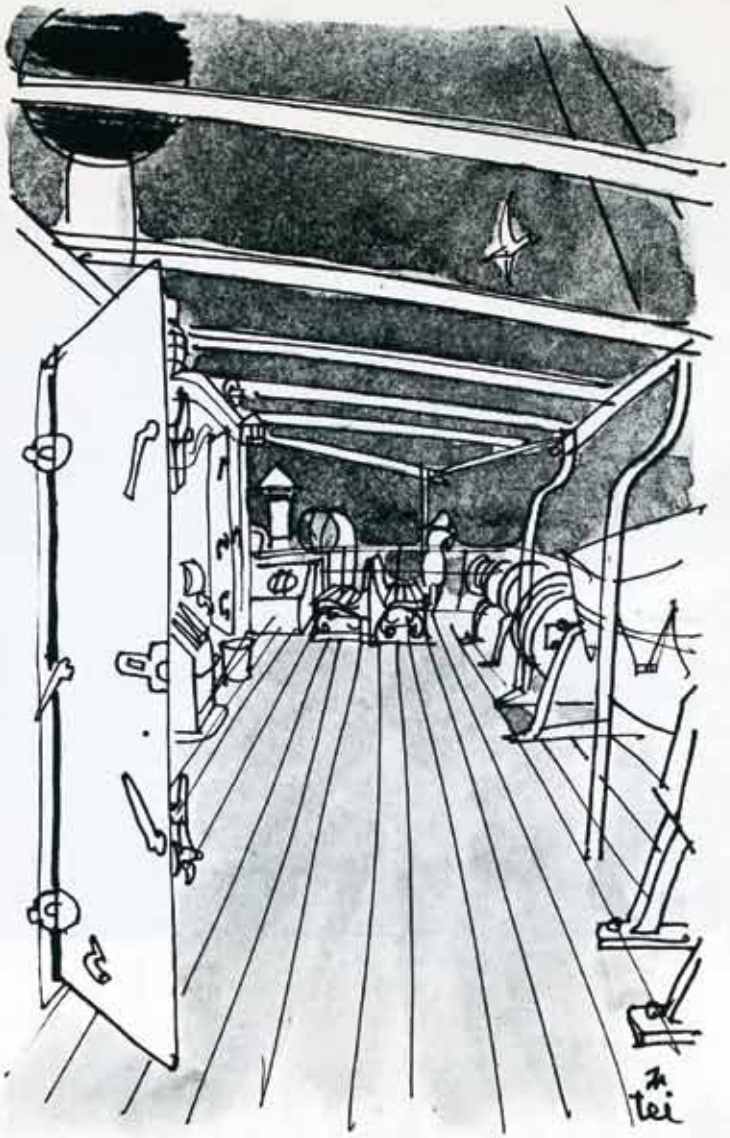
旅行シーズンという語もポスターの中によく使われている。然し、どうも考えてみれば可笑しい。夏だから海や山へ、秋だから高原や紅葉狩りにと誘うポスターは、冬になればスキーやスケートに矢張り誘い、春は春で桜や新緑に誘うわけで、要するに、こんな事なら旅行シーズンなどというものは一年中がそうなのであって、一年中がシーズンなら、シーズンなどというものは無いことになる。

僕は旅行が多い。勉強のための外国の旅行、趣味である僻地の旅行、演奏のための国内諸都市の旅行、そして、仕事場のある八丈島との往復、それらはいつも僕の予定表を埋めていて、とどまるところを知らない。僕は初めのうちは、旅行に出るたびに矢張りどきどきして、何処でも彼処でもの名所旧蹟を訪ね、名物を食べ、お土産などを買って、そのことを通して旅に出た意味を強化したりしていたのだが、この頃、旅を別の角度から考えるようになった。

考えて見れば、旅行というものは、自分が出掛けるわけである。その事を突きつめて考えれば、自分が旅に出ている事を自分で認識する事、それが旅なのである。さて、そうなると、旅というものはその諸々の手段の如何にかゝわらず、自分は常に不動でいて、目的地なり、目的地に到る風景なりを、自分の方にたぐり寄せる事が旅なのでは無いか、そうであればこそ、本当の喜こびが自分を取り巻き、本当の判断というものが、自分の眼を通して旅の意義を生むのではないか、そんな事を考えるようになった。

ポスターにつられて、他人が行くから自分も行かねばならないのだと錯角をおこして、ただよろよろとあっちへ走り、こっちへ走りする事は、だから、旅行の範疇には入らない。そういう旅への出方は、本当の旅では無くて〝移動〟しているという他は無い。そういう人達は、ただ、自分が移動している事に興奮して、目を見開き、カメラをパチパチ無意味にがちゃつかせるだけで、要するに自分が動いてしまっているのである。

旅にはもっと落着いた自分が要る。これは、人生の旅にも当て嵌まる、一寸大事な事でもあるのだ。そんな事をこの頃よく思う。



三芳悌吉・画